

## 第1回 川越市総合教育会議 会議要旨

- 1 開催日時** 令和5年10月18日（水）午前10時00分～午前11時30分
- 2 開催場所** 川越市役所東庁舎2階 教育委員会室
- 3 出席者** 川越市長 川合善明  
教育長 新保正俊、 教育長職務代理者 長谷川均、  
委員 嶋野道弘、 委員 佐久間佳枝、 委員 飯島希

### 4 会議の概要

#### 1 開会

#### 2 市長挨拶

本会議は平成27年度に設置され、それ以来、川越市の教育課題などについて様々な議論を重ねてきた。本日は「部活動の地域移行について」と「英語の学習について」の2つの議題について、広く意見を頂戴したいと思っている。

限られた時間ではあるが、本市の教育行政に係る課題を共有し、子どもたちの教育環境を整えていくために、皆様から忌憚のない意見を頂戴したい。

#### 3 協議事項

##### 事務局

川越市総合教育会議設置要綱では、市長が議長を務めることとなっているが、より活発な意見交換をするために、形式上の進行を事務局側で進めることを考えている。その点について、まずは是非を諮りたい。

##### 市長

政策企画課長に司会役を願いたいと考えるが、いかがか。

<一同異議なし>

##### 市長

それでは、政策企画課長に進行をお願いします。

#### (1) 部活動の地域移行について

##### 事務局

(資料に基づき説明)

事務局（政策企画課長）

説明を受けての質問、意見等をお願いしたい。

教育長

部活動の地域移行については、国や県も完全には方向性が定まっていない状況であるが、現時点での国、県の考え方を基に、令和5年度から令和7年度のステージⅠと令和8年度から10年度のステージⅡに分けて段階的に移行していく考えである。ステージⅠでは、平日、休日ともに従来通りの活動を基本としながら、休日の部活動外部指導員を増員していくとともに、複数校合同の部活動を可能な限り進めていきたいと考えている。あわせて、モデル地区を設定して、実証事業を行っていききたいと考えている。ステージⅡでは、平日は従来どおりの部活動を基本としながら、休日については、より一層、学校間の合同の部活動を進めていくことを考えている。当面は地域連携だが、最終的に目指すのは地域移行である。

部活動の地域移行を進める上で、運営団体、地域の指導者の確保が大きな課題であるので、文化スポーツ部と連携して市全体で取り組んでいきたいと考えている。また、費用の面も課題であり、部活動指導員に対する報酬費、民間に委託した場合の委託費、その他施設利用費などが想定される。これまで、部活動に関する保護者の費用負担はなかったため、今後、保護者の費用負担についてどのように対応していくのか検討が必要である。

部活動がこれまで担ってきた役割は、大変大きなものであると認識している。部活動は、学校生活の中で、生徒達の生きがいに繋がるものでもあるので、それが学校から無くなってどのような活動になっていくかということについて、生徒、保護者に十分に説明し、協力を求めているかなければならないと考えている。

市長

令和11年度以降は、平日の部活動も含め、部活動そのものを地域に移すことになるのか。

教育長

国としては、早急に地域移行を進めていくという考え方であるが、全国的に指導者の面や地域の受入れの面で、急には対応が難しいという状況があったので、昨年12月に軌道修正され、とりあえず地域連携から始めるということになった。川越市では、先ほど説明があったように、当面は土日の地域移行に着手し、段階的に進めていく考えである。

今後、進めながら課題が出てくると思うが、その都度、調整しながら進めていきたい。

教育委員

移行期間の対応として、生徒と教職員が部活動への参加を強制されず、参加するかしないかを、それぞれの意思で選択できるようにすることが望ましいと考える。

まず生徒については、地域のスポーツクラブや文化団体で活動しても、学校の部活に参加しても良いし、また、それらに参加せず、自分でコンピューター等のスキルを身に付け

るために時間を使うのも、趣味や遊びのために時間を使うのも良い、というように、過ごし方を自由に選択できることが一番大切だと思う。

次に教員についても、子育て世代の負担が大きいことなども考慮して、部活動への参加を強制するのではなく、自由に選択できるようにすべきだと思う。その場合には、指導者が不足してしまうので、その不足分に対して地域の指導者を充てるという考え方が良いと思う。これをやるためには、コーチングができる地域の指導者を育成することと、部活動に参加する教職員の評価を適正に行うことが必要であると思う。

地域の指導者については、WBC日本代表の栗山監督や阪神タイガースの岡田監督のように、選手が自ら考えて能力を伸ばしていくことをサポートするような指導を行えることが望ましいと思うので、今後、このようなコーチングができる指導者の育成が急務であると思う。このためには、市長部局の文化スポーツ部が中心となり、指導者育成の体制をつくっていくことが重要だと思う。

次に教職員の適正評価については、部活動への参加に対して手当を付けるなど処遇面で差をつけることで不公平感がでないように対応することが必要になると思う。

#### 教育委員

部活動の地域移行については、地域ごとに受け入れ態勢に差があることもあり、初めから一律で実施することは不可能なので、できるところから段階的に進めていくという対応が必要だと思う。この点からすれば、土日からやっていくという川越市の方向性は良いと思う。今後については、資料にもあるとおり、地域の実態把握が重要であると思う。地域でどのような活動が行われているかという視点だけではなく、どこで行われているか、どの学校の生徒が参加しているかというように、より詳細に実態把握を行う中で、どのように地域移行を進めていけばよいか方向性が見えてくるのではないかと思う。また、資料にはなかったが、既に取り組んでいる自治体の活動を視察することも必要だと思う。

#### 教育委員

私は、今までに子ども達を育ててきた経験から、部活動に対して感じたことを話したいと思う。

はじめに、部活動には多くの役割があると思うので、部活動の地域移行については、専門の部署を立ち上げて慎重に検討して欲しいと思っている。部活動は教育の一環であり、チームワークや上下関係などの社会性を身に付けるのに非常によい機会である。また、私の子ども達、その友達や保護者に聞いたところでは、学校には行きたくないけれど、部活があるから登校するという子どももいるということなので、部活のチームが精神的な居場所にもなっているのだと思う。このように、部活は、いじめや不登校の問題にも大きな役割を果たしている。保護者の中にも、学校の集まりには参加していないが、部活動のコミュニティにだけは参加して、そこで学校に関する情報交換をしているという方もいる。

このようなことを考慮し、今後、地域移行を進めるにあたっては、学校から完全に切り離すのではなく、学校が責任を持って担当の教員を配置して、テクニクなどの指導は地域の指導者にまかせるという形でやって欲しい。

また、今後、子ども達が大人になった後も地域の中で活動したいと思えるように、地域の方と子ども達が、ひとつの目標を目指して一緒になって楽しみながら取り組むことができるような機会を設けて欲しいと思う。

文化系の活動についても、囲碁や華道など、学校ではあまりできなかった活動にも選択肢を広げられればよいと思う。

#### 教育委員

私の子どもは、部活に入らず地域のクラブに参加していたのだが、その経験に照らしてみると、今回の地域移行には良い点が多いと思っている。

令和11年の完全移行に向けて、移行期間をどのように活用していくかという点では、非常に頭が痛いと思うが、完全移行までには今年も含めて6年間あるので、計画的に準備を進めるとともに、保護者に対して、今の小学1年生の子どもたちからは地域に完全移行するというのを、しっかりと説明していけば意外とスムーズに移行できるのではないかなと思う。

幼稚園では、サッカーや柔道など、地域の方たちのクラブチームが入っていて、既に地域連携でスポーツ等の活動が行われている。幼稚園や保育園のころからクラブチームの経験がある子どもは、小学生になってもクラブチームの活動を継続することが多いので、中学生になるとクラブチームを辞めて学校の部活をやらなければならないということの方が不自然だと思う。中学生になると、勉強もあるので、クラブチームと部活を両立することが難しく、どちらかを諦めなければならなくなってしまう。そのことが挫折につながってスポーツ等の活動が嫌いになるという例もある。

また、部活に入っている子が先輩や先生と交友関係を広げていく一方で、部活に入らない子の交友関係が広がらないことによって、周りとの距離感が生まれてしまい、いじめに繋がってしまうということも起こり得る。

子どもたちが、スポーツや文化活動を自由に選択できるようになるのは良いことだと思うので、6年後に向けて保護者への説明など、しっかりと段階を踏んで進めていって欲しい。

#### 教育委員

土日の部活動を前提に地域移行について議論しているが、部活は月曜日から金曜日までの5日間で十分ではないのか。

#### 教育長

子ども達は、平日の限られた時間だけではなく、さらに練習を積んで対外試合に勝ちたいといった意欲がある。その観点からは、土日の部活動は効果的だと考えてこれまでやってきた。ところが最近は、土日に、野球やサッカーなど地域の活動に参加する子どもが増えてきている。また、子ども達が、地域で生涯にわたって文化芸術活動を継続していくための素地をつくる機会を設けることも必要であると感じている。併せて、教員への負担等も考えると、やはり地域移行が必要であるのだろうと考えている。

#### 教育委員

現状をみたときに、例えばスポーツ分野では、アスリート志向が強い子どもがいる一方で趣味としてやりたい子どももいるなど、スポーツへの取り組み方が多様化している。最近、スポーツの国際大会では、日本の中高生が世界のトップレベルにいることも多いので、そういう子どもの能力を伸ばせるようにすることも必要であると思う。このような点からも、能力や目的に応じて時間の使い方を選択できるようにするべきだと思うので、地域移行を進めていくべきだと思う。

#### 教育委員

地域移行することによって、広いエリアから子どもが集まるようになれば、いままではできなかったような様々な種類の活動も可能になると思うので、そこには可能性を感じている。

#### 教育長

最近では、いろんな分野に挑戦したいという子どもが出てきている。市内には、ゴルフやピアノ、マウンテンバイクなどで活躍している子どもがいる。そのような様々な活動を選択できるようにしていくためにも、部活動にこだわらない方が良いと思っている。1964年の東京オリンピックの時は、部活が主な育成の場で、そこから国際的な舞台に出て行ったが、今はクラブチームが主な育成の場になっていると感じる。そういう点からも、地域移行を進めていくべきだと思う。

また一方で、教育委員の意見にもあったが、地域移行後にも教員が責任者として関わるということは、教育の観点からみても必要なことだと思う。様々な課題があるが、部活の地域移行というのは、ゆくゆくは川越市民の生涯スポーツの継続にもつながるものであるので、市長部局の文化スポーツ部ともしっかりと連携しながら、引き続き検討していきたい。

#### 事務局（政策企画課長）

本日の議論を受けて、市長に総括をお願いしたい。

#### 市長

委員の皆様から、それぞれの経験に基づいた貴重な御意見をいただいた。

教育長から話があったが、川越市では、試行的に部活動外部指導員を配置して、地域移行に向けた第一歩を踏み出したという状況である。今後、どのような実施方法が、児童生徒や保護者にとって、また、地域のスポーツ団体、文化芸術団体の方々にとって良いのか、市長部局と教育委員会で連携しながら、更に検討を進めていきたいと考えている。これからもよろしくをお願いしたい。

## (2) 英語の学習について

事務局

(資料に基づき説明)

事務局（政策企画課長）

説明を受けて、質問、御意見等をお願いします。

教育長

私が子どもの頃は、受験科目として英語の勉強をしていたので、文法、語彙、長文読解、英作文などがその中心であり、実際に英語を話すことはほとんどなかった。その結果、未だに、外国人と自信を持ってコミュニケーションすることができず、常々残念に思っている。

その一方で、現在はグローバル化の時代となり、英語の授業については、中学校の学習指導要領において「授業は英語で行うことを基本とする」とされている。しかし、実際には未だに文法等の説明を中心とする授業が散見され、会話をする時間が非常に少ないことが課題であると感じている。このため、子ども達の英語で話す能力は低く、会話をさせてみても簡単な英単語のやり取りになってしまい、円滑なコミュニケーションができない状況も見受けられる。

このような中で、今後、英語で話す能力を向上させていくために、英語指導助手の活用が重要であると考えている。現在、各市立学校56校で31名の英語指導助手を配置しているが、全校に1名ずつ配置できるようにしていきたい。

指導法の観点からは、熊谷市、川口市、横浜市などで導入されているラウンドシステムに注目している。一度、指導主事を他市の視察に行かせたが、それ以来、導入に向けた動きは滞ってしまっている。

また、中学生全員が英検3級以上を取得できるようにしたいと思っている。さいたま市と熊谷市では、外国語教育の施策についての効果を検証するために、業者テストを公費で中学生に受験させていると聞いている。また、英検受験料の補助を行っている自治体も複数存在する。市長には、英検受験料の市費負担について財政面の協力をお願いしたい。

教育委員

資料の8ページにあるとおり、川越市では、「外国語でコミュニケーションを図る資質・能力を着実に育成する」ことを、今後5年間の教育政策の目標として掲げている。これは良い目標であり、この目標に向かって取組を進めていくべきだと思う。学習指導要領にも、英語の5領域として、「聞くこと」「読むこと」「話すこと(やりとり)」「話すこと(発表)」「書くこと」が掲げられているが、5つのうち「聞くこと」「話すこと(やりとり)」「話すこと(発表)」の3つはコミュニケーションに関わるものであり、英語でコミュニケーションするという意識を取り組んでいくことが非常に重要となる。

しかし、この観点からみると、川越市の施策は、少し見直しが必要であると思う。資料10ページにあるように、第三次川越市教育振興基本計画の「施策1 確かな学力の育成」

では、グローバル化に対応する教育の推進として、英語指導助手の配置の充実を掲げている。英語指導助手が全校に1名ずつ配置されているのが理想だとは思いますが、現実問題として、現在の、各市立学校56校で31名という配置は、財政的にはかなり頑張ったものと評価できる。今後は、英語指導助手の人数を増やすこととともに、活用方法を考えることが重要ではないかと考える。先週、静岡県清水町の公立小学校で英語の授業を見学したが、清水町では、小学校と中学校あわせて7校で、英語指導助手が全校に1名ずつ配置されていた。また、配置が充実しているだけでなく、ある学校で授業を行うとなると、他の学校に配置されている英語指導助手にも声がかかり、7名全員が1校に集まるという柔軟な活用がなされていた。また、授業では、グループでの自己紹介など、活発なコミュニケーションが行われていた。こうしたやり方は、英語指導助手の側も歓迎しているとのことであった。このように、英語指導助手を、配置した学校に固定してしまうのではなく、柔軟に活用することを検討して欲しい。

次に、授業のやり方について、コミュニケーション重視といいながらも、実際の授業では、ほとんどコミュニケーションがされていないということが問題だと思う。改善に向けては、教員の意識改革が重要であり、また、英語の授業では、全て英語を使って行うように変えていかなければならない。また、英語はコミュニケーションの中で繰り返し使うことが習得のために一番効果的だと思うので、熊谷市のラウンドシステムのように、川越市もコミュニケーションを中心とした新たな授業スタンダードの確立に向けて、検討していく必要があると思う。

## 教育委員

私は、英語を話す機会がないということが、英語を使えるようにならない大きな要因だと思っているので、学校生活の中で英語を話さなければならない機会を設けることが効果的だと考える。例えば、英語の学芸会を学年ごとに実施するのが良いのではないかと。セリフを覚えるために、ヒアリングやスピーキングを繰り返し練習することになるので、楽しみながら習得できると思う。

逆に、英検等の検定試験を、学校教育の中に取り入れることは、子ども達にとっても教員にとっても負担になってしまうのではないかと懸念している。子ども達にとっては、英語嫌いを助長してしまいかねないし、教員にとっては、英検の結果が自分の評価につながるとなるとプレッシャーになってしまうと思う。

それよりは、コミュニケーションを通じて子ども達が楽しめる授業の方法を英語指導助手と一緒に考えた方がよいと思う。例えば、子ども達が、川越の町並みや歴史を英語指導助手に説明する機会を設け、その後の振り返りとして、英語指導助手が、「あの表現はこうしたほうがいいよ」などのアドバイスを行うことが考えられる。英語でコミュニケーションをとろうとすると、思ったとおりに伝えられないもどかしさを感じて、どのような言い方をすれば伝わったのかを振り返って考えると思うが、その繰り返しで英語を覚えていくものだと思う。

また、英語のコミュニケーションでは、ボディーランゲージも重要なので、授業の中で、もっと取り入れたほうがよいと思う。

## 教育委員

私は、英語は自分の意志を伝えるためのツールとして学ぶべきであると思っているが、実際には、試験勉強になってしまっている。英語は受験科目であるため、そうになってしまうのも仕方ないと思うが、今後は、世の中の流れも英会話を重視する方向性になると思っている。まずは、今の英語の授業のやり方が上手とは言えないと思うので、研修制度の充実による教員の意識改革が必要だと考える。例えば、費用はかかるが、海外の英語教育の現場で指導方法を学ぶことができるように留学制度を設けたり、外部の英語スクールに通いやすくするために補助金制度を設けたりすることなどが考えられる。英語教師をスペシャリストにして、英会話を強いまちを市の特徴にしていくというやり方もあるのではと考えている。

また、市立川越高校には、世界に通じる商業の知識を学ぶことを目的とする国際経済学科がある。学科名に「国際」と付くのとから、英語を学びたいければ、市立川越高校の国際経済学科に行こうと言われるぐらい英語に力を入れて欲しい。また、高校生が、インバウンドの観光客に対して、川越の文化を英語で説明する部活などがあっても良いと思う。

英会話は、生活の中に取り入れることで自然に身につくものだと思うので、中学校の部活動の地域移行の中で、英語の活動ができる場をつくることや、英語のコンクールを実施する、英語週間をつくるなどの取組を全市的に展開していくことが必要だと思う。

## 教育委員

まず、英検については、5、6年前にこの場で意見交換したと思うので、是非早期に実現して欲しいと思う。

また、英語を学べば海外で活躍できるという考えは短絡的だと思う。海外で活躍するためには、海外で通用するスキルを身に付けることがなにより重要であるので、英語を話せるようになることだけを目的として英語を学ぶのではなく、英語を使って何をするのかを、しっかり押さえないといけないと思っている。また、今後は、インバウンド観光客への対応のために、国内で英語を使う機会が増えてくるかもしれない。今、日本を訪れる外国人が非常に多く、観光地に観光客が集中してしまうオーバーツーリズムも問題になっており、今後、川越市にもさらに多くの外国人観光客が訪れることになるかと予想される。聞いた話によると、飲食店などでは、観光客が、自分の国の食文化にないものが提供された場合、英語での説明がされなければ、全く食べないということが起こっているそうである。川越市は多くの外国人観光客が訪れる土地なので、特に実践的な英語教育が必要だと思う。商業科のある市立川越高校に、そのような教育を率先して実施して欲しいと思う。

もう1点、自分も含めて多くの日本人が英語を話せないのは、国内で英語を使う機会が少ないということが大きな要因であると思うので、子ども達が英語を使う機会を増やすことが重要であると考えている。ある市では、小学校低学年から英語の授業を行っているが、あまり良い取組とは思わない。子どもは遊びの中でものを覚えていくのが自然である。最近、川越市で実施した英語キャンプは、英語以外の言葉の話してはいけない環境の中で、遊びを通じて英語を覚えていくことができる良い取組だと思う。試験勉強によ



って英語を話せるようにしようとしても、英語嫌いに繋がってしまう可能性があるので、遊びを通して自然に覚えられるような仕掛けをしていくことが重要だと思っている。

いずれにせよ、目的を持って英語を学ぶことが重要だと思う。川越から世界に出て活躍する人が増えれば、自分も同じようになりたいなと思って、英語に取り組む子どもが増えるので、英語の教育を通して、子ども達に夢を与えることも意識して取り組んでいただきたい。

#### 教育委員

川越市としては、英語教育の一環として英検を取り入れることを検討しているとのことだが、中学生全員に受験させる方向で考えているのか。

#### 教育長

できれば全員に受験させたいと思っていたが、子どもの英語嫌いを助長してしまう、教師にとってプレッシャーになってしまうなどの御意見をいただいたので、慎重に検討しなければいけないと思ったところである。

また、英語キャンプの話題が出たが、川越市では、昨年度から、夏休みに英語キャンプを実施している。今のところ期間が1日だけなので、今後は、もっと集中的に1週間ぐらいの期間を確保して実施できないか検討したいと思っている。英語指導助手は、昨年も今年も、ほぼ全員が参加してくれた。1人の子どもに対して複数名の英語指導助手が付いて指導できたので、すごく贅沢な環境になった。これからさらに広げていきたいと思う。

#### 教育委員

私は、英語の授業をあまり多くみてきたわけではないが、日本の英語指導は、言葉に頼りすぎていると感じている。先ほど他の委員からも話があったが、英語の授業では、英語の会話に加えてボディランゲージやアイコンタクトでのやり取りを、もっと行った方が授業に活気がでると思うので意識して欲しい。

#### 教育委員

英語の指導に関して、是非とも失敗を恐れない雰囲気をつくって欲しいと思う。普段、英語を使っていない人が英語で話すのだから、間違った表現やアクセントになってしまうのは当然だと思うので、そういう失敗を笑わないような雰囲気づくりに重点を置いて取り組んで欲しいと思う。

#### 教育委員

失敗を恐れずにチャレンジするという話があったが、市にも是非そうあって欲しい。さいたま市や熊谷市の先進的な取組が取り上げられていたが、川越市独自の取組はみられない。中核市として他市に先駆けて新しい取組をするという姿勢が必要だと思うので、失敗を恐れずチャレンジしていただきたい。

教育長

現在31名配置している英語指導助手を、今後さらに増やしていきたいと思っているが、財政負担を考慮すると、JETプログラムの活用が良いと思っている。現在、川越市にJETによる英語指導助手は10人配置されている。JETによる英語指導助手は、国費による補助があるので、市の財政負担は少ないが、出入国の手続きや社会保険、普段の生活など様々な面で教育委員会の職員が対応しなければならない。このような事務に時間がとられてしまい、英語教師の意識改革に取り組もうにも、そこまで手が回らなくなっている。

学校に関わるものは全て教育委員会だと考えるのではなく、市全体で考えていくべきものもあると感じている。2、3年で学校に戻らざるをえない指導主事では、川越市独自の取組をやるうにも限界がある。市長には、市長部局に英語指導助手を担当するセクションを設けることや、教育委員会の中に、英語指導助手の担当セクションを設けることなどを、今後相談させていただきたい。現在の体制では、英語指導助手の活用方法の工夫や英語教師の意識改革などは難しいと思う。

事務局（政策企画課長）

本日の議論を受けて、市長に総括をお願いしたい。

市長

様々な御意見に感謝する。

今まで、教育に関して、多くの予算が必要となるハード整備等に中心的に予算を配分し、ソフト面の取組までは手が回らない部分があったと感じる。

学力テストの結果における他市と川越市との差を考えると、ソフトの面の取組も充実させる必要があると感じた。教育長から御意見のあった組織の面についても、できる限り努めていきたいと思う。

事務局（政策企画課長）

本日は、様々な御意見をいただき感謝する。いただいた御意見等については、取りまとめて担当課に伝えたいと思う。

最後に、市長に、会議全体をとおしての総括をお願いしたい。

市長

委員の皆様から貴重な意見をいただき、大変充実した会議になったと考えている。課題は常にたくさんあるが、皆様の御意見を取り入れながらしっかりと進めていきたいと考えている。本日はありがとうございました。

#### 4 その他

特になし

#### 5 閉会